

「人生100年時代」、言葉は定着したが・・・



第一生命経済研究所 代表取締役副社長
佐久間 啓

最近「人生100年時代」という言葉を耳にしたり目にすることが増えた。今の時代を表すキーワードとしてすっかり定着した感がある。ロンドンビジネススクールのリンダ・グラットン、アンドリュー・スコット両教授が書いた『ライフ・シフトー寿命100年時代の人生戦略』（東洋経済新報社）が2016年10月に出版されると大きな話題となり「人生100年時代」が今の時代を語る一つのキーワードになった。その後2017年9月に政権の看板政策である人づくり革命推進に向けて首相をトップとした「人生100年時代構想会議」の議論がスタート、2017年末には「2017年ユーキャン新語・流行語大賞」にもノミネートされた。今や多くの新刊本の表題、帯等に使われ、新聞やTV、ネットの世界でも頻繁に見かけるようになった。

我々はこれまで日本の超高齢社会という「今の時代」をこの「高齢」という言葉以外でうまく表現することができていなかったように思う。おまけに超高齢社会を語る時、これは誰がどれくらい負担していくのかという負担の分配の問題として語られることも多く、明るい話題か少々重い話題かと言ったら後者の文脈で議論され語られることが多かったように感じる。

そこにこの「人生100年時代」である。超高齢社会は多くの人が長生きする社会であり、若い世代にとっては「この先相当長い人生が待っている、当然不安はあるが反面多くの選択肢があるということだから今からいろいろ準備していく必要がある」ということだし、人生後半組にとっても「定年、老後という単純なライフプランでくぐりにされるのではなく色々な顔を持ってアクティブに生きていける社会」ということだろう。こうした「今の時代」に多くの人が感じている空気を的確に表現したのが「人

生100年時代」という言葉なんだろうと思う。負担の分配というような少々憂鬱な問題を思い出させたり、どこか他人事のような言葉より、自ら選択した生き方で人生を楽しむという前向きな響きを感じられることもあって急速に拡がり定着したのだろう。いや、それよりもどの年代向けにも使える便利なフレーズだからこそ定着したのだと言ったほうがいいのかもわからないが。

ただ、当たり前だが今の時代を的確に表現できて何となくポジティブな響きのあるキーワードが定着したからと言ってまずは一安心、のはずはなく、少子化、教育、医療・介護、働き方等々課題は山積みであり複雑な方程式の答えが見えたわけでもなくみんなが幸せになるわけでもない。例えば「人生100年時代」は価値観も多様化し、世帯主＝夫・会社員、妻＝無職、子供2人というような以前よく聞いた所謂モデル家計（家族）は更に減少していくだろうし、個人の学び方、働き方にもいろいろなパターンがあること自体普通になっていくと思われる。今の社会はそうした多様性に十分対応できる仕組みになっているだろうか。また総人口・生産年齢人口の減少、日本人の平均年齢の上昇が続く中でどうやって生産性を上げ成長を維持していくのか。社会の仕組みを変えらるというと、税制だったり規制の枠組みだったりいわゆる国の政策の問題だと考えがちだが民間部門、特に企業部門の役割も大きいように思う。ここはどちらが先に動くというよりこれまで同様密に連携しながら進めていける環境を維持したいところだ。いずれにせよ、これまで築き上げてきた人生75年？80年？時代の社会の仕組み、我々自身の考え方も変えていく必要があるということだろう。一安心でほっとしている余裕はない。

仕組みを変えらるということでは正しく「革命」だ。革命に必要なのは覚悟とスピード。本当に革命が必要なときにそれが出来なければ多くの方がより苦勞する。喫緊の課題は少子化への対応だろう。政権が掲げる人づくり革命、物騒な言い方かもしれないがこの「革命」は何としても成功させないといけない。